



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	《死せる魂》について
Author(s)	灰谷, 慶三; Haiya, Keizo
Citation	スラヴ研究, 19, 35-57
Issue Date	1974
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5039
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112984.pdf



《死せる魂》について

灰 谷 慶 三

1

ゴーゴリがロシアの文壇に登場したのは、1830年、彼が21才のときであった。中編小説《ピサヴリューク、あるいはイワン・クパーラの前夜》Бисаврюк, или Вечер накануне Ивана Купала が雑誌「祖国雑記」Отечественные записки の2月号、3月号に掲載されたのである。¹⁾《死せる魂》Мертвые Души に着手したのはそれから5年後、1835年、彼が26才のときである。以後、1842年5月の第1部出版までの7年間と、更に1852年43才で死ぬまで第2部の完成に努力を傾けた10年間、合わせて17年間、つまり自己の作家活動の全期間中の大半を《死せる魂》の執筆に費やしている。ゴーゴリの作品の多くは1835年までに書かれているのであって、それ以後、死までの間に書かれた主要作品は、旧作の改作を除けば、彼が多作家でなかったとは言え、戯曲《検察官》、《結婚》、中編小説《外套》、《ローマ》(未完)くらいのもので、およそ作家ゴーゴリの心血は《死せる魂》一作に注がれたと言えよう。だが苦行ともいうべき努力にも拘わらず、第2部は未完に終わってしまった。²⁾

《死せる魂》第2部が未完に終わった原因が、農奴制下のロシアの現実を理解しないゴーゴリの、1843年頃から顕著になった精神的危機ないし思想的転換と彼の作家的才能との背馳にあるとする見解は、ゴーゴリに宛てたペリンスキイの有名な書簡³⁾を待つまでもなく、19世紀以来今日に至るまで一貫して存在するのであるが、⁴⁾ゴーゴリに思想といわれるものの転換があったのかどうかは、はなはだ難しい問題であって、アポロン・グリゴリーエフのような反対意見も存在するのである。⁵⁾

本稿においては、《死せる魂》第1部の、主として創作過程及び形式を取扱うことによって、ゴーゴリの作家としての使命感の深化と作家的才能の本質の問題という側面から

- 1) この前年、すなわち1829年の3月には、すでに抒情詩《イタリア》Италия を雑誌「祖国の子」Сын Отечества の12号に発表し、6月には В. Алов のペンネームのもとに田園叙事詩《ガンツ・キューヘリガルテン》Ганц Кюхельгартен を自費出版しているけれども、《イワン・クパーラの前夜》によって文壇の注目をはじめて受けた(ブレトニョフ、ジュコーフスキイ等と面識を得る)という点で、1830年を文壇登場の年と見なすのが妥当と思われる。
- 2) ゴーゴリは、《死せる魂》第2部の原稿を2度焼却した。1度目は、1845年の7月頃、2度目は死の直前の1852年2月である。なお、この他にも П. В. Анненков の回想によれば(П. В. Анненков, Литературные воспоминания, М., ГИХЛ, 1960, стр. 123), 1843年にも焼却したということになっているが、この事実は不明である。
- 3) 「わたしが思うに、……あなたがロシアを深く知っているのは、芸術家としてのみであって、思索する人間としてではないのです」(В. Г. Белинский, Полн. собр. соч., М., АН СССР, 1953~'56, т. X, стр. 213.)
- 4) см. М. В. Храпченко, Творчество Гоголя, М., Изд-во АН СССР, 1954, стр. 502—; Н. Л. Степанов, Н. В. Гоголь, 2 изд., М., ГИХЛ, 1959, стр. 531—.
- 5) А. Григорьев, Собр. соч.; под ред. В. Ф. Садовника, М.—Пг.—Казань, 1916, вып. 8, стр. 6. これについては、拙稿「1830年代前半におけるゴーゴリの эстетизм と демонизм について」日本ロシア文学学会会報, 第11号, 1968, 29頁参照。

《死せる魂》第2部挫折に至る一要因をさぐることにしたい。なお、ここに言う創作過程とは、作者の創作意図の主要な筋道を明らかにしようとするもので、主なものだけで6種類ある《第1部》の草稿の異同を取りあげるのではない。その点については、必要最小限にとどめることをおことわりしておく。

2

《死せる魂》は、正確には《チチコフの遍歴、あるいは死せる魂——ポエマ》*Похождение Чичикова, или Мертвые Души – Поэма* と題して1842年5月に出版された。ゴーゴリ自身の絵筆になるこの初版本の表紙では、*Поэма* の一語が *Мертвые Души* よりもはるかに大きく描かれており、それは単にレイアウトの問題として退けられるべきものではなく、この小説の構成、ジャンルの点から見て、非常に興味のあることと言えよう。

周知のように、《死せる魂》は、チチコフなる人物がある地方の県庁所在地に現われて、近隣の地主から死んだ農奴を買い集め（というのは、当時のロシアでは次に行なわれる戸籍調査までは、その間数年間に死んだ農奴も有価物件とみなされていた）、それを担保に後見会議院から金を借りようとするが、事が露見しそうになって遁走するという話で、通常の長編小説にみられる物語的筋の発展があるのではない。ある物語が作品の中で独立した力をもって展開して行くというのではない。しかし、作品の構成はかなり複雑であると言えよう。死んだ農奴を売買してひと儲けしようという奇想天外とも言うべき着想を核として組み立てられた無数の面から成り立っているのである。そしてこの核をなしているのは、主題としてのこの着想であると共に、それを着想したチチコフでもあり、またチチコフを背後から支える作者自身でもある。チチコフを中心として構成される無数の面の中で主要な面をなしているのが、マニーロフ、ソバケーヴィチ、ノズドリョフ、プリュシキン、コロボチカといった地主の描写であり、その他様々の面をなしているのが、知事をはじめとする役人たちの描写、コペイキン大尉や、キーファ・モーケヴィチとその息子モーキイ・キーフォヴィチなどのエピソードであり、ロシアの自然の描写を含む個々の場面や作者の抒情的 *отступление* である。これらの面はどれひとつをとってみても、それぞれが独立していると同時に、作品全体としては面と面とが巧みに組み合せられた多面体をなしていると言えよう。

ところで、〈ポエマ〉と自ら名づけたこの独特の形式をゴーゴリが最初から構想していたわけではなかった。ゴーゴリが《死せる魂》についてはじめて言及しているのは1835年10月7日付のプシキンに宛てた手紙においてである。彼は次のように書いている。「《死せる魂》を書きはじめました。主題 *сюжет* は長大なロマンスにふくらんできました。そして、非常に滑稽なものになると思われます。ただ、今のところは第3章で中断しました。簡単に会えることのできるような、適当な告げ口屋 *ябедник* を探しているのです。私はこのロマンスで、たとえ半面からでも全ロシアを示したいと思っております」⁶⁾ 《死せる

6) Н. В. Гоголь, Полн. собр. соч., в 14 томах, АН СССР, Л.-М., 1940~52, т. X, стр. 375. ゴーゴリの作品、手紙等、一切の引用はすべてこの版によった。以下、Гоголь, т. I, стр. 1 のように示す。

《死せる魂》について

魂》第4章は大ぼら吹きで中傷屋のノズドリョフの描写に当てられているから、第3章を中断して「適当な告げ口屋」を探しているという手紙の文面とは一致するのであるが、主題は長大なロマンスにふくらんで来つつも、「滑稽なものになると思われる」、「たとえ、半面からでも、全ロシアを示したい」というような主観的期待ないしは願望が述べられていることから察せられるように、この段階のゴーゴリはまだかなり模索の状態にあった。しかも注意しておくべきことは、ゴーゴリが《死せる魂》を〈ロマン〉と呼んでいることである。

ゴーゴリが《死せる魂》を書こうと思い立ったそもそもの動機は必ずしも明らかではない。彼自身の言葉によれば、《死せる魂》の主題も《検察官》の場合と同様プーシキンから与えられたことになっている。ゴーゴリは後に(1847年)《作者の告白》Авторская исповедьの中で書いている。「印刷になった私の初期の作品の中に人々が認めたあの陽気さの原因は、ある種の精神的欲求にあった。私自身にも判らない憂うつが発作があらわれていた。それは、おそらく、私の病的状態からおこったものであったろう。自分自身を楽しませるために、私は思いつくだけの滑稽なものをなんでも考え出していた。滑稽この上ない人物や性格を思い出し、なぜそんなことをするのか、何のためするのか、またそんなことをして誰にどんな利益があるのか、などといったことはまったく考えもせずそれらの人物性格をわざとをもって滑稽な状態に置いてみるのであった。……だがプーシキンのおかげで私は問題を真剣に見るようになった。彼は、すでに以前から私に長編 большое сочинениеにとりかかるように勧めていた。そして、最後に、自分自身の主題を、その主題を素にして彼自身が何かポエマのようなものを創ろうとした、そして彼の言葉によれば、他の誰にも与えないような主題を私に与えてくれた。これが、《死せる魂》の主題であった。」⁷⁾以上の証言が真実かどうかはにわかに断定できないが、ゴーゴリ自身の動機についての積極的発言が得られない以上、主題云々は別として、長編執筆をプーシキンに勧められたことだけは確かかも知れない。

もっとも、ゴーゴリがロマンスを書こうと試みたのは《死せる魂》がはじめてではなく、1830～32年にかけてウクライナの昔に取材した歴史ロマンス《ゲトマン》Гетьман(未完)を手掛けていたし、1835年には同じく歴史ロマンス《タラス・ブーリバ》Тарас Бульбаを完成していた。しかも、ゴーゴリの創作系譜を見てもならば、歴史的過去と現代生活への関心がパラレルに進行しているのであって、《タラス・ブーリバ》は現代に探し求められぬ英雄への讃美・憧憬であり、それと表裏の関係にあるのが〈ペテルブルクもの〉にみられる現代の俗悪、卑俗、倦怠、堪えきれぬほどの平凡さに対する諷刺なのである。従って、現代生活に取材したロマンスを書いてみたいという一般的要求がゴーゴリの内にまったくなかったと否定することもできないように思われる。むしろ、そうした一般的要求が未だ具体的姿をとって十分に発酵するまでに至っていなかったと言うべきであろう。「たとえ半面からでも全ロシアを示したい」という構想は、主人公のロシア遍歴という点に魅かかれただけの漠然としたもので、彼は未だ、自己の天賦の才能の導くままに、ある意味では無意識のうちに笑いを創造していたのである。すでに《ディカニカ近郷夜話》Вечера

7) Гоголь, т. VIII, стр. 439-440.

на хуторе близ Диканьки や《ミルゴロト》 Миргород にあらわれていた笑い、滑稽さの中にひそむ人生の空虚、倦怠、卑俗をゴゴリ自身は意識していなかった。プーシキンに宛てた手紙の「非常に滑稽なものになると思われます」という言葉は、その結果であった。

主題に対する作者としての明確な意図、全編に対する一定の把握がなくては長編小説をゆるみなく描き切ることにはできない。作者の一貫した構想のもとに十分な表現力を駆使するのでなければ、ロマンの特性を生かすことはできないであろう。ゴゴリは書き進めるにつれて壁に行き当たった。後に彼は、やはり《作者の告白》の中で次のように述べている。「プーシキンは《死せる魂》の主題が、主人公と共にロシアを周遊し、きわめて多種多様な性格を数多く引き出す完全な自由を与えるという点で、私に適していると見ていた。私は詳細な計画をたてずに、主人公自身がそもそも如何なるものであるべきかを明瞭に理解せずに書きはじめようとした。私は簡単に考えていたのである。チチコフの遂行する滑稽な目論見自体が、私を多種多様な人物や性格に導くであろう、と。また、私自身の中に生れた笑いたいという欲求は、感動的なものと混合させようと私が思っていた多くの滑稽な現象を、ひとりで創造するであろう、と。だが、私は筆を進める度に疑問にさえぎられた。なぜこんなことをするのか？ これは何のためなのか？ このような性格は、それ自体がいったい何を語るべきなのか？ このような現象自体がいったい何を表現すべきなのであるか？ と」⁸⁾ 従って、最初の三章をゴゴリがプーシキンの前ではじめて朗読したときには、後のゴゴリ自身の言説にもかかわらず、M. A. ツャプロフスキイの言うように、プーシキンに強い印象を与えなかったかも知れないのである。⁹⁾

3

ゴゴリは《死せる魂》の行き詰まりを喜劇の執筆へと振り向けた。しかし、それは意識的というよりは、「喜劇が書きたくて手がふるえる」¹⁰⁾ という多分に自然発生的な要求

8) Гоголь, т. X, стр. 440.

9) ゴゴリは1846年に発表した《友人との往復書簡撰》Выбранные места из переписки с друзьями 中の「《死せる魂》に関し、諸種の人物に宛てた四通の手紙」Четыре письма к разным лицам по поводу «Мертвых Душ» の第三の手紙で次のように書いている。「私が《死せる魂》の最初の方の章を、それが以前あったままの形でプーシキンに向けて読みはじめたとき、いつもは私の朗読を聞いて笑っていたプーシキンが（彼は笑いが好きだった）、次第に顔を曇らせ始め、ついにまったくふさぎこんでしまった。朗読が終わったとき、彼は憂うつな声で言った。『ああ、わがロシアはなんと憂うつなのだろう』この一事は私を驚かした。……このときから、私はもう《死せる魂》が引き起こすことのできたその重苦しい印象をどうやって緩和すべきか、ということだけを考えるようになった」(Гоголь, т. VIII, стр. 294)。しかし《Русский Архив》の編者 П. И. Балтеевの回想録によれば、プーシキンの友人 П. В. Нанчюркинが「ゴゴリがプーシキンの前で《死せる魂》を読んだというのは同意できない。なぜならプーシキンはいつもすぐれた作品については、すべて、彼（ナンчюркин）に話してくれたが、《死せる魂》については話さなかったからだ」という。これについてツャプロフスキイは「ナンчюркинの主張は、この朗読がプーシキンに強い印象を残さなかったということだけを言ったにすぎない」と述べ、В. Гиппиусもこの説に同意している（Н. В. Гоголь в письмах и воспоминаниях, сост. В. Гиппиус, Изд-во Федерация, М., 1931, стр. 120）。ゴゴリが朗読しなかったという反証はないし、プーシキンが《死せる魂》についてナンчюркинに話さなかったという点から見ると、ツャプロフスキイの説が妥当であろう。

10) Гоголь, т. X, стр. 375.

《死せる魂》について

によるものであった。彼は、先に引用した1835年10月7日付のプーシキン宛の手紙で、《死せる魂》の中断を報告すると共に、「喜劇の主題を、真にロシア的なものならアネクドートでも良いから与えてほしい」¹¹⁾と頼みこんでいる。その結果生まれたのが《検察官》Ревизорであった。喜劇の主題をプーシキンから受け取ると、ゴーゴリは直ちに執筆に着手し、約2カ月後の12月3日、初稿を脱稿している。

ゴーゴリは《検察官》を書きあげるとすぐに、ポゴジンに宛てて次の様に書いている(1835年12月6日)。「この1年半はぼくによって不名誉な年月でした。なぜなら一般の意見は、ぼくが自分の仕事でないことをやったと言っているからです(筆者註：ペテルブルク大学での中世史の講義のこと)。この1年半の間ぼくはそこから沢山のことを引き出し、心の宝庫に付け加えました。もはや子供っぽい考え、以前のぼくの限られた範囲の知識ではなく、真理と恐ろしいほどの偉大さに満ちた崇高な思想がぼくを興奮させました。……屋根裏に近いぼくの狭い部屋の中で、ぼくにすばらしい一瞬を与えた天上の客に平安あれ！誰もあなたを知らないのです。新たな眼覚めのときまで、あなたを心の底に再びしまっておきます。ときが至れば、あなたは大いなる力で引き出され、学者面した無学者の厚顔無恥、学者ぶった無学者的俗物、いつもうなづいている公衆、等々、その他諸々の人は自説に固執できなくなるでしょう。……(中略)ぼくは今や新鮮な空気の中に出ました。花に雨が必要なように、書齋に坐りこんでいる人には散歩が必要なように、この爽快さは生活に必要なものです。今やもっと嘲笑するのだ、もっと嘲笑するのだ。喜劇万才！」¹²⁾ここに見られるのは、一気呵成に《検察官》を書きあげた後にゴーゴリを訪れた靈感とも言うべき心の喜び、心の満足である。しかし、奇妙なのは、ペテルブルク大学での中世史の講義がみじめな失敗に終わったことをゴーゴリ自身気づかぬはずはないのに、¹³⁾その経験から、「真理と恐ろしいほどの偉大さに満ちた崇高な思想」が生れ出て、彼を興奮させていることだ。このゴーゴリは大学から600ルーブリの年金をもらうだけで無駄に時間を費やしていることにあせりを感じていたゴーゴリ¹⁴⁾とまったくかけ離れた存在というより他はない。

この真理に満ちた思想の興奮は、明らかに《検察官》の完成がもたらしたものであったろう。「そのとき私の知っていたロシアのあらゆる悪しきもの、何よりも人間の正しさが要求される場所及び場合に行なわれている一切の不正、それらをひとまとめにし、一挙に嘲笑してやる」¹⁵⁾(《作者の告白》)ことによって、ゴーゴリは自らを苦しめていた大学での生活からも解放されたのであった。¹⁶⁾

11) Там же.

12) Гоголь, т. X, стр. 378-379.

13) ゴーゴリの講義の聴講生のひとりだったツルゲーネフは、ゴーゴリの滑稽な様子を後に次のように語っている。「実を言えば、彼の教授の仕方は独特のやり方であった。第一に彼は3回の講義のうち2回は必ず休講した。第二に彼は教室に出てもはっきり物を言ったことがなく、パレスチナや東方諸国の風景や地図の銅板画を私たちに見せながら、少しも筋道をたてずに、しかも口の中で何か訳の分からぬ事を喋っているだけだった。……私たちは彼が歴史について何も判っていないことを知らされた(しかも、それはおそらく間違っただけではなかった)。」см. Н. В. Гоголь в русской критике, М., Гослитиздат, 1953, стр. 532.

14) 1835年10月7日付、プーシキン宛の手紙。Гоголь, т. X, стр. 375.

15) Гоголь, т. X, стр. 440.

16) ゴーゴリは結局1835年12月31日付でペテルブルク大学を辞めた。

《検察官》は、ゴーゴリにとって作家的転機であった。

この歓喜にはずんだ、高められた感情は、1836年4月ペテルブルクのアレクサンドリンスキイ劇場で行なわれた《検察官》初演の惹起した騒然たる情況、ことに尊敬すべき方面からの非難による衝撃によって、一時失なわれてしまったかのように見える。「私は、この戯曲にあきあきしてしまった。……すべての人が私に反対している」と彼は言う。しかし、同時に彼はこうも言う。「真実のほんの些細な幻影——このお前に対して、ひとりの人間ではなく全階層が反対して立ち上がる」¹⁷⁾ (1836年4月29日付、シチュープキン宛の手紙)。「真実のほんの些細な幻影」——この表現は、落胆、疲労したこのときのゴーゴリの最後の抵抗と言える。十日余り経ったときの彼は、自分の状況を幾分冷静に客観化して次のように述べている。「現在、すべての階層が私に対してもはや決定的に立ち向かった、ということに私は困惑しているのではありません。同胞が自分に対して間違っ敵対しているのを見ると、なぜか重苦しく、悲しいのです。(中略)私は自分の健康を治し、方々へ行って気晴らしをし、それからいくつか定住地を選んでこれからの作品について熟考したい。すでに私はもっと深く熟慮して創作すべきときに来ています」¹⁸⁾ (1836年5月10日付、ポゴージン宛の手紙)。

ゴーゴリは、この内省が必要であるという意識を経て再び上昇するのであるが、実際に彼の内で起った内省、熟慮がどのように進行したかは、後に彼が《作者の告白》の中で述べているような形で論理化されていたかと言えば、必ずしもそうとは言いきれないであろう。ここでゴーゴリが幾分かでも自己を客観化しえているとすれば、それは自分がうちのめされたという感情を抑えて、人々が自分を間違っ理解したことにどう対処すべきかと考えている点にあるのであり、首都の無学者たちから辱しめられ、軽蔑された自分のその「意見が、彼ら自身に影響を与え、彼らの鼻づらを取って引きまわしている」¹⁹⁾ (5月15日付、ポゴージン宛の手紙)のはなぜなのか、と考えている点にあるのである。

しかし《検察官》をめぐって起った論争とそれからゴーゴリの受けた衝撃による外国行(1836年6月6日)は、ゴーゴリにとって、従ってまた《死せる魂》の成立にとって重要な意義をもつことになった。彼自身、この外国行を「私の生涯における重大な転機、重大な時期」²⁰⁾ (1836年6月28日付、ジュコーフスキイ宛の手紙)と言っている。

実際、ゴーゴリは祖国を離れるや否や、すでに新しい湧き立つ力、歓喜に満ちているのだ。「私は、この私をこの世に送り出してくれたものに感謝すべきではないでしょうか？世間の人々には見えも気づかれもしない、なんという崇高な、なんという神々しい感覚が、私の生命に満ちていることでしょうか！誓って申しますが、私は普通の人間が創らないような何かを創ります。心の中にライオンのような力を感じています」²¹⁾ (ジュコーフスキイ宛の手紙)。

この手紙は、1836年6月28日、旅先のハムブルクから書かれたものである。《検察官》

17) Гоголь, т. XI, стр. 38.

18) Гоголь, т. XI, стр. 40-41.

19) Гоголь, т. XI, стр. 45.

20) Гоголь, т. XI, стр. 49.

21) Гоголь, т. XI, стр. 49.

《死せる魂》について

初演から約2カ月後である。この文面から察しうるのは、《検察官》完成のときに得たあの喜ばしい、有頂天とも言うべき感情に似たものである。

いったいゴーゴリは、どんな内省によって、どんな筋道を辿ってこのような感情に到達したのであるか？「ライオンのような力」はどこから生れて来たのであったろうか？ゴーゴリは自分の興奮した感情を吐露するときには、これまでにみてきたように、よく「崇高な思想」「神聖な喜び」とかいったあいまいな表現を用いているが、このような憂うつから歓喜への移行の中に論理的筋道を求めるのは困難であって、むしろここにこそゴーゴリの内的世界の特徴のひとつを見ることができるのである。もちろん、このように述べたからと言って、彼に自己を客観化したり、論理化したり、対象を内在化したりする能力が欠けていたというのではない。彼の自己に対する峻厳な態度、晩年に見られる自己の作家的立場に対する執拗なまでの追求は、この能力を十分に示している。しかし、彼が自己に対する峻厳な態度と共に、それと対応する自尊心、より強く言えば、自己崇拜的一面を持っていた。これは、後に、《友人との往復書簡撰》の中に明瞭な形をとって現われてくるのである。これを、もっと本能的な面で考えてみれば、彼の感情は、常に自分の置かれた客観的情勢との一体性を持っていると言えよう。情勢の中にすっぽりとはまってしまうのである。この特徴は必ずしもゴーゴリ特有のものではないが、彼の場合にはそれが極端なものであった。

《検察官》脱稿後の感情は、執筆に没頭しながら目の前に浮かぶロシアの悪しきものの一切を嘲笑していることに満足してゆく感情が、有頂天の歓喜へと昇華したのであった。《検察官》上演の惹起した騒ぎは彼を狼狽から落胆へ、落胆から精神的抑圧状態へと追いつめたのであった。しかし、ひと度ロシアを離れ、無学者どものけがらわしい群を目や耳にしなくとも良い状態になると、その安心感解放感は、彼を再び喜びの頂点へと持ちあげたのである。だが、彼がまったく感情の動くままに揺れていたというのではない。そこには、彼の作家としての動かし難い自覚があった。そこでは、ロシアに対する愛が彼を常に本能的に根底からつき動かしていた。それが彼の中に、新しい力、偉大な創造への予感となって表われたのであった。ゴーゴリの作家としての使命の論理的追求——何を、何のために、なぜ書くのかの問題は、基底から内省によって上昇するのではなく、頂点から、つまり、自分の突然感じた崇高な思想、というよりは気分といったものから次第次第に下降し、展開して行くのである。

4

ゴーゴリは《死せる魂》第1部のほとんど全編を外国、特にローマで書いた。1836年6月から《第1部》出版のために帰国した1841年10月はじめまでの5年余りの間に、彼がロシアに帰国したのは1回だけで、それも1839年9月から翌年5月まで滞在しただけである。しかも、このロシア滞在中は、《死せる魂》の執筆を中止している。これについてゴーゴリは、私はロシアには何も書くことができない。ロシアを離れることが必要だと繰り返し述べている。²²⁾ 彼の手紙を見るならば、国外にいて彼が如何に生々としてい

22) 例えば、《作者の告白》の中で「私は、想像のうちに一層生々とロシアに住まうために、ロシアから遠く離れていることが必要だった」と述べている。Гоголь, т. VIII, стр. 449.

たかが判る。「今、私がこうして離れているのは、私の知育のために、天から送られた神の摂理のようなものです」²³⁾ (1836年6月28日付、ジュコーフスキ宛の手紙)と、ロシアを離れてすぐに書いているのである。自分の外国行を〈摂理〉のように感じているところに、ゴゴリが無意識のうちにこの外国旅行にかけた意味を読みとれるのである。

9月22日、ポゴジンに宛てた手紙では次のように書く。「ロシアでは私が見るに堪えなかった程の醜悪な顔の一大コレクションがあります。彼らのことを思い出すと、今でも唾を吐きかけてやりたくなります。現在、私の前には他国が、私の周りには他国があります。しかし、私の心の中には、ルーシ——醜悪ではないルーシ、ただひとつ、美しいルーシだけがあります」²⁴⁾

ロシアの醜悪な顔に堪えきれないゴゴリの気持は「思い出すと唾を吐きかけてやりたい」という言葉によって、いかに強いかかわかろうというものである。彼の心は美しいロシアを求めているのに、ロシアにいれば彼の肉体は汚辱の中にある。彼はこの分裂に堪えきれない。彼の精神は不安定となり、肉体は衰弱へと導かれてゆく。現実のロシアの中には、彼の心はあまりにも強烈な憎悪のために美しいロシアを見失ってしまうのだ。ところが国外では、彼の肉体は汚辱から解放され、心には美しいロシアがよみがえってきて、心ゆくまで想い描くことができる。こうして、はじめて、ゴゴリは〈美しいロシア〉の対極にある、自分の体験した〈醜悪なロシア〉をも頭の中に客観的に構想できたのである。彼は生々とし、快活さを取り戻し、創作力は勃然と湧いてくる。彼の「全ロシアを描こう」という意図は、ここではじめて現実的な力となって彼を駆り立て、壮大なプランの完成へと進ませたのである。

1836年11月12日付のジュコーフスキ宛の書簡では、次のように書いている。「私はペテルブルクで始めようとしてできなかった《死せる魂》に取りかかりました。私は、最初の部分をすっかり書き改め、更にその先の全プランを練り、今では年代記を書くように平静にそのプランをうつしています。……もし、この作品をしかるべく完成しましたなら、それは、どんなにか巨大な、どんなにか独創的な主題となることでしょうか！ なんという多様な堆積でありますことか！ その中には全ロシアがあるのです。これは、私のはじめてのかなり良い作品、私の名を恥かしめない作品になることでしょうか。(中略)《死せる魂》は……生々と新鮮に、元気よく進行しています。そしてまったくロシアにいるように思われます。私の前には、わが国のすべてが、わが国の地主、わが国の役人、わが国の士官、わが国の百姓、わが国の百姓小屋、——要するに正教ロシアのすべてがあるのです。私は、自分がパリにいて《死せる農奴》を書いているのだと思うと、おかしくさえなります。……今は《死せる魂》にすべてを打ちこんでいます。私の作品は巨大な、偉大なものですから、すぐには終わりません。さらに新しい階層、多くの雑多な紳士諸君が私に向って立ち上がるでしょう。しかし私はどうすべきだというのです！ 同胞と敵対するのがすでに私の運命なのです。忍耐です！ 目に見えぬ何者かが私の前に立ち、力強い錫杖を揮って、書くのです。私は、自分の名前が私の死後、私よりも幸福になるだろうということ

23) Гоголь, т. XI, стр. 49.

24) Гоголь, т. XI, стр. 60.

《死せる魂》について

知っています。そして、同胞の子孫は、おそらく眼を涙に濡らしながら私の霊に和解の言葉を述べるでしょう」²⁵⁾

この手紙には、先に引用したプーシキン宛の手紙と較べて明らかな違いを見てとれる。すなわち、彼は「全プランを練り直した」と確信に満ちているのである。「生々と新鮮に、元気よく進行しています」、「パリにいて《死せる魂》を書いていると思うと、おかしくさえなります」という言葉からは、全プランをたてたあとで、筆を進めながらひとりで嬉しくなり、はしゃいでいる快活な様子のゴーゴリを伺うことができる。それは、ゴーゴリの国外での精神的安定を物語ると共に、その安定がロシアにおいては書けないゴーゴリの、ロシアとの宿命的対立という苦悩を陪音として伴っていることを見過してはならないのである。「子孫が眼を涙に濡らして」という表現は、後に顕著になった彼の予言者的態度、自己陶酔的な面を感じさせないでもないが、この手紙の全体を支配しているのは、〈醜悪なロシア〉を客観化し、その像を構築したゴーゴリが、その対極をなす〈美しいロシア〉にかけている夢であり、愛である。

1837年1月のプーシキンの死はゴーゴリに強烈な衝撃を与え、一時的に《死せる魂》の執筆を中断させたほどであった。²⁶⁾ これによって、ロシアの腐敗に対するゴーゴリの憤激は増大したが、一方、またそれに比例して彼の〈心の中の美しいロシア〉に対する憧憬、愛は一層燃えたったのである。彼は1837年3月、プーシキンの赴報を知らせてきたポゴージンの手紙に対して次のように書き送っている。「きみは、ぼくにきみ達の許へ来るようにと奨めている。何のために？ 祖国での詩人の永遠の運命を繰り返すためにですか？ ……ぼくが、わが国の教養ある無学者たちの夥しい集積を見なかったとでも言うのですか？ ……ところで、ぼくが、わが国の広大無辺の、わが祖国ロシアの大地を愛していないということがあるでしょうか！ ぼくは一年近く他国に暮し、美しい空、芸術と人間に溢れた世界を目にしています。しかし、……一行だってぼくは他国に捧げることはできなかったのだ。ぼくはどうしようもない鎖で自分の祖国に結びつけられている。そして、ぼくはわが国の貧しい百姓小屋、暗い世界、わが国の煙り出しのない百姓小屋、むき出しの空間の方が、ぼくをあいそよく迎えてくれるすばらしい空よりも好きなのだ」²⁷⁾

外国生活は、ゴーゴリの創作対象、すなわちロシアのすべて、醜悪なるロシアをも、美しいロシアをも客観化させ、彼の創作を進めさせた。それは、彼の創作活動を支える、醜悪なロシアに対する彼の憎悪と、心の中にある美しいロシアに対する彼の愛それ自体が、彼の内で対象化されたということに他ならない。なぜなら、醜悪なロシアが頭の中で客観的に構築されるためには、それに注がれる彼の憎悪の意味がまずもって問われなければならないからである。同時にそれは、対極にある愛の意味をも問うであろう。

《検察官》以前の、なぜ自分自身がそのようにするのかの理由もわからないままに、無意識の笑いをつくり出し、おそらくは、自分の精神的憂うつ状態を脱却したいがためにあ

25) Гоголь, т. XI, стр. 73-75.

26) 1837年3月30日付のポゴージン宛の手紙で次のように述べている。「私は、彼の助言なしにはいかなる作品も書きませんでした。私の良いところはすべて彼のおかげです。今書いている作品も彼の創造になるものです。……私の作品はどうなるのでしょうか？」 Гоголь, т. XI, стр. 91.

27) Гоголь, т. XI, стр. 91.

らゆる滑稽なものをつくり出したゴーゴリは、今や国外にいて、自分の精神的快活さを見出し出したとき、「検察官」のまきおこした嵐と自分の落ちこんだ憂うつな精神状態を、自分なりに納得してつき破らなければ、作家として前進できない状態にあったであろう。自己のロシアに対する憎悪と愛の意味を論理化する作業を進めることなしには、「検察官」で「ロシアの悪しきものすべてを嘲笑した」その意味を自己の内的世界に定着させることはできず、「死せる魂」を書き進めることはできなかつた筈である。「検察官」初演後に論文形式で書かれた「ある文学者に宛てた手紙の断片」Отрывок из письма, писанного автором вскоре после первого представления «Ревизора» к одному литератору はそのことを示している。²⁸⁾ 彼は次のように述べている。「観客の熱狂と受け取り方について、私は気にしていなかった。——劇場にいたすべての者の中で、唯ひとりの審判者を私は恐れていたのであるが、その審判者というのは、私自身だったのである。私は自分の内部に他の一切のものを抑えて自分自身の戯曲に反対する非難と苦情の声を聞いていた。」ここで問題なのは、彼自身が審判者だということである。彼は自分の内部を切開する必要に迫られていたのである。これは、先に引用したポゴジンに宛てた手紙(1836年5月10日)の「今や、もっと深く熟慮して創作すべきときが来ました」という言葉とも一致する。彼は、自分の内部にあって自分を見つめるもうひとりの自分に気づいていたのだ。ゴーゴリは、自分の内部にある審判者の宣言を明らかにしようとして、作業を開始しなければならなかつた筈である。1836年秋、外国で「死せる魂」の全プランを練り直したとき、当然、彼はこの作業を自己の内部で行っていたと思われる。彼は後に「作者の告白」の中で次の様子に書いている。

「私は十分に決定的な、明確なプランなしには、これ以上書けないことをはっきり知った。また、自分の創作の目的 цель 及びその本質的有益性 полезность と必然性 необходимость をまずもって自分自身によく説明すべきであるということを知った。そしてこの結果は、著者自身が自分の労作に対する力強い、すなわち、すべてに生命を与え、それなしには進まないような愛に燃えるであろうということ、要するに、著者自身、自分が地上に召し出され、才能と力が与えられたのは自らの創作に従事することによって義務を遂行するためにこそあるのだ、と感得し、確信するであろうということ、又その義務を遂行することによって、同時にあたかも、実際に国家の勤めについているのと同様に自分の国家に奉仕しているのだと感得し、確信するであろうということ、これらのことが私にははっきり判った。」²⁹⁾

ゴーゴリは、「自分の創作の目的及び本質的有益性と必要性」を理解すれば、「国家に奉仕していることを感得し、確信するであろう」と言うのだ。従って、彼の論理からすれば、まず、国家的奉仕の観念が大前提となっている。彼には、作家活動に入る前からロシ

28) この文章は「検察官」初演直後の5月25日に書かれたことになっている(Гоголь, т. IV, стр. 104)。В. ギッピウスによれば対象となっている文学者とはプーシキンである。(Н. В. Гоголь в письмах и воспоминаниях, соед. В. Гиппиус, М. Федерация, 1931, стр. 127)。しかし、執筆の期日にはなお不明の点があり、初演後の時期には下書き程度であったかも知れない。はじめて発表されたのは1841年雑誌「上演目録」第6号である。

29) Гоголь, т. VIII, стр. 441.

《死せる魂》について

ア国家に対する奉仕の観念が色濃く存在したことはよく知られているが、³⁰⁾ 彼がここで自分の創作を国家奉仕の観念に結びつけていることは重要である。彼は、作家としての自分とその創作目的、有益性、必然性を論理的に追求しようとした最初に、この大前提、国家奉仕という一般的、一元的世界から論理の網を広げて行ったことになるからである。

彼は、更に「自分の創作の目的及びその本質的有益性と必然性」について次のように説明する。「私は、自分が行きずりの性格をとりあげ、だが真にロシア的で基本的なわれわれの特性が一層目立って、深く刻印されたもののみを選ばなければならないのは、偶然でないことを知った。私は、まだ必ずしもすべての者によって正当に評価されていないロシア人の本性のあの高い特質と、まだ不十分にしかすべての者によって嘲笑され、罵倒されていない、あの低い特質とを、私の作品の中でもっばら表わしたかった。私は、明確な心理的現象のみを集め、自分が以前から秘かに人間に対してなしてきた観察、——これまでその未成熟を感じて筆にまかさなかつた、そして正しく表現されれば、われわれの生活の中の多くのことを解明するのに役立つであろう観察を挿入したかった。要するに、私の作品を読んだ後、完全な一個のロシア人、——他の国民に比べてはるかに多く、ありとあらゆる富と才能を自分の分け前として持ったロシア人、同様に、他のあらゆる国民よりも特別多く見出されるあの多くの欠点を持ったロシア人、そのロシア人があたかも無意識に立ち現われるようにしたかったのである。私の許に貯えられていた抒情的な力は、それらの価値を、ロシア人がそれらに対する愛に燃えるように私を助けて表現させ、又同様に、私の許に貯えられていた笑いの力は、それらの欠点を、読者が自分自身の中に見出してさえ、憎悪するであろうように、はっきりと私をして表現させるであろうと、そのように私は考えていた。」³¹⁾

ゴーゴリの創作（ここでは《死せる魂》を当然意味している）の目的とは、他の諸国民よりもはるかに多くの美德と欠点を持ったロシア人をその〈完全〉な姿において描こう、というのである。そして、彼の創作の有益性とは、こうした完全なロシア人が正しく示されれば、生活の中にある多くのことの解明に役立つということなのである。

以上、《死せる魂》の全プラン確立にあたってのモチーフを、彼の外国旅行のもたらしたロシアの客観化、ゴーゴリの内部でのロシアへの憎悪と愛の対象化と、《作者の告白》の中での論理との関連のもとに考察してきた。

ところで、《作者の告白》は、《友人との往復書簡撰》に対する世の批判に依りて、自己の作家的歩みと思想の状況をできる限り客観的に書こうとしたものであるが、自己弁明的性格を拭いきれないし、それを除いたとしても、10年前の自己についての記述がどれだけ正確かは、これもまた問題となるところである。従って、「全美徳と全欠点を有する完全なロシア人」を描くという目的、及びその生活の中での有益性ということ、を、《死せる魂》

30) 1827年の伯父コシャロフスキイに宛てた手紙は有名である。「私は国のすべての働き場所、すべての職務をあれこれと考えたあげく、ついにひとつ、司法省を選ぶことにしました。この仕事は最も偉大なものになるでしょう。そして、私が善行をなすのは、ここだけで、ここだけが人類のために真に有益なものとなるでしょう、(Гоголь, т. X, стр. 111-112)。また《作者の告白》の中でも国家への奉仕の考えが自分から消えたことは決してなかつた、と述べている。

31) Гоголь, т. VIII, стр. 442.

の全プランを構築当時、ゴーゴリが《作者の告白》の中で言うように明確に考えていたかどうか確定することはできない。

その点で問題になるのは、彼の言う「自分の創作の本質的必然性」であろう。彼が明らかにしている限りでの本質的必然性は、「自分が、行きずりの性格をとりあげ、だが、真にロシア的で、基本的なわれわれの特性が一層目立って、深く刻印されたもののみを選ばなければならないのは、偶然でない」ということである。では、なぜこれが彼の創作の必然性なのか。彼の論理からすれば、ロシア国家、ロシア社会に奉仕することが、作家としての自分の義務だからである、ということになる。

一般的に言って、「創作の本質的必然性」とは、かなり意味のあいまいな言葉ではあるが、少くともひとりの作家の作家的本質を離れて語ることはできない筈である。作家的本質が作品を絶体的に貫いてこそ、彼の精神世界が作品に対象化され、作品は生々したものになってくる。そうでなければ、創作という文学的世界はもっと一般的な世界の中に解消してしまおうであろう。ところがゴーゴリは、ここで自分の作家的本質を自分の論理から落してしまっている。なぜなら彼は、一般的人間の国家に対する義務観念の世界から、直接に「自分の創作の本質的必然性」まで降りて来てしまっているからである。

それでは、ゴーゴリの作品を彼の作家的本質が必然として貫いてはいないのか？ そんなことはない。作家の意志の如何にかかわらず、そうでなければならず、またそうでしかあり得ないものとして作家的本質は創作の本質的必然性にかかわってくる。ゴーゴリ自身、このことにまったく気づいていなかったわけではない。他ならぬ《死せる魂》の中で次のように述べている。

「絶えず目前にありながら、無関心な目には見えないすべてのもの——われわれの人生を幾重にも取りまいてるちっぽけな事柄の、身の毛のよだつような恐ろしい泥沼人生の、ときとして悲しくわびしい途上にひしめいている、冷たい、とるに足らぬ俗物どもの奥底を、洗いざらい明るみにさらけ出そうという大それた考えをおこし、仮借ないのみのようなたくましい力で、それら奥底をすべての人に見えるようにはっきり浮き彫りにしようと大それた考えをおこした作家の宿命は、有名詩人のそれとはちがうのだ！（中略）

しかもこの先ながいこと、私は奇妙な主人公たちと手をたずさえて進み、巨大で流転する人生を残りくまなく眺めつくし、世間には見えもせず知られもしない涙を通して、人生を見つめてゆく運命を不思議な力によって背負わされているのだ！」³²⁾（第7章）

ここに述べられた〈不思議な力〉こそ、ゴーゴリの作家的本質に根ざすものであった。彼は、この〈不思議な力〉という表現によって、悪徳、卑俗、凡俗、怠惰を摘出する自己の作家的本質を直観力によって、いわば本能によって把握したことを示している。これは決して意識的な、論理的思考による把握ではないであろう。ここに、彼が自分の創作の本質的必然性を説明するに当って、自己の作家的本質をその論理の中へ組みこむことのできなかった理由がある。

彼が、自分の作家的本質について述べていることを、今少し引用する。「作家としての自分自身をきみに明らかにしよう。私については二、三の面をとりあげて、いろいろなこ

32) Гоголь, т. VI, стр. 134.

《死せる魂》について

とが言われたが、主要な本質は決定されなかった。それを知っていたのはプーシキンだけだ。彼はいつも私に言っていた。人生の卑俗さをかくも明らかに示しうるこの才能、とかく目につかない些末事を誰の目にも大きく映るように、卑俗な人間の卑俗さをこれほどの力で描きうる才能は、まだどの作家にもなかった、と。これが私自身にだけ属する主要な本質であって、まさしく他の作家にはないものである」³³⁾ ゴーゴリは、プーシキンに以上のことを指摘された当時、自分の方からはそれを明らかにすることができなかったと述べている。

だが前述したごとく、いずれにせよ、彼の作家的本質は彼の創作を決定してくる。従って、あらゆる欠点を持ったロシア人を描き出そうとするとき、彼が自己の作家的本質に無意識ではあっても、矛盾なく書き進めることができる。そのとき彼は、卑俗な人間の卑俗さを描く力をどこまでも徹底させて行くであろう。だが全美徳を描き出そうとするとき、この〈卑俗な人間の卑俗さ〉を余すところなく描き出す能力は、創作対象と作家的本質との矛盾として顕現せざるをえない。彼がもし、〈卑俗な人間の卑俗さ〉を描き出すという自分の作家的本質を、自分の創作の本質的必然性との関係において意識的に把握していたら、〈全美徳と全欠点〉を持ったロシア人を描くという計画に逡巡せざるをえなかったろう。当然、彼は矛盾につき当ることを予知できたであろうからである。しかし、彼は矛盾を予知してはいない。逆に彼は、自分の作品が偉大なものになり、自分の名が後世に残ると無邪気に予言してすらいるのである。(前掲の1836年11月12日付、ジュコーフスキイ宛の書簡)。

以上を結論的に言うならば、《死せる魂》の全プランをたてたときのゴーゴリの〈全美徳と全欠点〉をもったロシア人を描くというモチーフは、当時において彼が自分の作家的本質を本能的に把握したにとどまり、〈創作の本質的必然性〉とのつながりにおいて客観的、論理的に把握していなかったということによって、逆に、たとえ《作者の告白》の中で後に述べているほど明確ではなかったとしても、それに近い形で彼自身の内部に形成されていたと考えられるのである。従って、ゴーゴリは意識的に創作にとりかかった当初において、すでに後の矛盾を自己のうちに内包していたのだ、と言えよう。

5

第2節で述べたように、《死せる魂》執筆当初には、ゴーゴリはこの作品を〈ロマン〉と言っている(1835年10月7日付、プーシキン宛の手紙)。ところが、《死せる魂》の構想がほぼ成った1年後には、自分の作品が〈ロマン〉の形式には納まらないと述べている。「今、机に向って苦心している作品については、これまでも長い間熟考してきましたし、これから先もまだ長い間熟考することでしょうが、ポーヴェスチにもロマンにも似ない、長い長い数巻にもなるもので、死せる魂という題です。今のところ、きみが知る必要があるのはこれで全部です。もし神が、私のポエマをしかるべく完成するよう私を助けて下さるなら、それは私のはじめてのかなりの作品になるでしょう。その中では全ロシアが

33) 《友人と往復書簡撰》の中の「《死せる魂》に関し諸種の人物に宛てた四通の手紙」の第三の手紙。(Гоголь, т. VIII, стр. 292).

反響するでしょう」³⁴⁾ (1836年11月28日、ポゴジン宛の手紙)

ゴーゴリはポーヴェスチにもロマンにも似ないものとしてポエマと言っているが、プランをたてた直後であり、「きみが知る必要のあるのはこれで全部」だと言っているところからみて、ポエマという名称に托した意味は、あまり明確なものでなかったのであるまいか。そのことを示すのは、1840年1月10日付のマクシーモヴィチ宛の手紙である。その中でゴーゴリは《死せる魂》をポエマではなく、ロマンと呼んでいるのである。³⁵⁾

いずれにしても、最終的にゴーゴリが《死せる魂》に〈ポエマ〉なる名称を附したのはどのような考えからであったろうか。このことを明らかにするのは、未完のまま残された《ロシア青年のための文学の教科書》Учебная книга словесности для русского юношества である。³⁶⁾ これが書かれた動機は、当時この類の種々の本が出版されたことに刺戟されたことであろうが、³⁷⁾ 直接には《死せる魂》をめぐる起こったベリンスキイと K. アクサーコフの論争に関連して書かれたことは間違いない。³⁸⁾

ゴーゴリは、この《教科書》において、先ず文学をポエэзия поэзия という言葉で統括し、さらにこのポエэзияを二つに大きく分類する。

「彼(詩人)は、二つの方法で他人に感覚 ощущение を伝える。一つは、彼自身が直接に感覚を伝えるときである。そのとき、彼の文学 поэзия は抒情的 лирическая なものとなる。今一つは、他の人物をとりあげ、彼らを生々とした例証の中で活動させるときである。そのとき、彼の文学 поэзия は劇及び物語的文学 драматическая и повесву-ющая となる。」³⁹⁾

ゴーゴリが文学を二つに分類し、劇と物語文学という形で戯曲と小説形式とを一つのジャンルに統一したのは、彼の文学的才能を表わすものとして興味深い。なぜならば、プーシキン、レールモントフを見れば明らかのようにロシア近代文学の始祖たちが詩人として出発しているのに対して、ゴーゴリは後世に残るような韻文作品を書いていないし、⁴⁰⁾ 若干の評論を除いて彼の創作分野が戯曲と小説に限られていることを考えれば、この二つを統一した分類の仕方は、単に作品の客観的性格を分類したというだけでなく、彼の才能の

34) Гоголь, т. XI, стр. 77.

35) Гоголь, т. XI, 272. この手紙について、タマルチェンコは、マクシーモヴィチの原稿依頼に対する返事にすぎないから、ゴーゴリがロマンと言っても別に問題はない、としている(История русского романа, т. 1 АН СССР, М.-Л., 1962, стр. 327)が、そう単純ではあるまい。

36) この草稿は、1844から1845にかけて執筆されたと推定される(Гоголь, т. VIII, стр. 804).

37) 例えば Н. И. Греч の《Учебная книга русской словесности》や П. Георгиевский の《Руководство к изучению словесности》等をあげることができる。

38) K. Аксаковが評論《Несколько слов о поэме Н. В. Гоголя „Похождение Чичикова, или Мертвые души”》(1842)において、ゴーゴリを評して現代のホーマー、シェイクスピアとたたえ、《死せる魂》を《イリアス》、《オデュッセイア》と言ったのに対して、ベリンスキイは、ホーマの世界は、積極的、現実的、普遍的、世界史的な、従って永遠不滅の内容を表わしているが、《死せる魂》はあらゆる他のロシアの作品と同様、まだそのような内容を表現するに至っていない。なぜならそのような内容を汲み取る場がロシアにないし、無い袖はふれないからだ、と反論した。(Белинский, Полн. собр. соч., В. 13 томах, М., АН СССР, 1947-1959, т. V 253-259, 419-433).

39) Гоголь, т. VIII, стр. 472.

40) 《ガンツ・キューヘリガルテン》は習作とみなすべきはある。

《死せる魂》について

必然的結果として、このような分類がなされたと考えるべきである。

さらにゴーゴリは、この劇と物語文学をいくつかに分類しているが、《死せる魂》を〈ポエマ〉と名付けたことに関連しているジャンルについて、次のように述べている。

「すべての劇及び物語的創作の中で、もっとも偉大で、もっとも完全であり、もっとも巨大で多面的なのは、エポペーヤ эпопея である。主人公自身の周囲には広大な広がりの上に立つ全世界が光りをあてられ、一部の人間ではなくて、全民衆が、ときには多くの民族さえ光りを当てられる。」エポペーヤにおいては、「消滅した古代世界のすべてが全人類の記憶に永遠に残るように、同じ太陽によって照らされた同じ光輝の中で、あたかも決して消えることのないかのように現われる。」そして、「多くの人間、事件、現象とのつながり、関係、接触の中で表現される卓越した人物を主人公に選ぶ。」従って、「エポペーヤは全世界的な作品である。」⁴¹⁾

以上が、ゴーゴリのエポペーヤに対する内容規定であるが、全人類の記憶に永遠に残る古代世界のすべての再現、あるいは、卓越した人物を主人公に選ぶ等の内容からみて、ゴーゴリがエポペーヤとして《イリアス》と《オデュッセイア》を想定していたことは明らかである。

ゴーゴリにおいては、このようなエポペーヤに対置されるものとして、ロマンがある。

「ロマンはエポペーヤではない。それはむしろドラマと呼ばれてよい。ロマンは、ドラマに似て、非常に制約のある作品である。それはまた、厳密に、そして熟慮の末、巧みに立てられた筋 завязка を含むものである。……ここでは、ドラマと同じように、人物相互間の極めて緊密な結びつきのみが、許される。……ロマンでは、ドラマにおけるように時間的経過が速やかに行なわれ、主要な事件は、人物自身の現実的利害によって結合され、その事件の中で登場人物たちはもつれ合い、また事件は、湧き立つ過程によって人物自身を發展させ、その特徴をより強く、速やかに示すのである。」「ロマンは、生活のすべてをとりあげないが、生活の中の主要な事件、その制約ある空間にも拘わらず、生活をあざやかな姿で示さざるを得ないような事件をとりあげる。」それ故、ロマンにおいては「あらゆる人物が決定的活動舞台を要求し、」「作者は、彼らひとりひとりの運命にわずらわされるのである」⁴²⁾

以上のように、ロマンをドラマに似た一定の制約された空間での表現形式と規定したゴーゴリは、エポペーヤとロマンとの中間に新しい表現形式を設定する。

彼は、「近世になってから、ロマンとエポペーヤのあたかも中間をなすような一連の物語作品が現われた」⁴³⁾と述べ、それを〈小型式のエポペーヤ〉 меньший род эпопеи と名付けている。この小型式のエポペーヤはどのような内容をもつであろうか。

小型式のエポペーヤは、「彼（作者）によって選択された時代の特質、及び風俗の中に

41) Гоголь, т. VIII, стр. 478.

42) Гоголь, т. VIII, стр. 481-482.

43) ゴーゴリはアリオストとセルバンテスの名を挙げている。《死せる魂》と《ドン・キホーテ》を対比させてはじめて論じたのはベリンスキイである (Белинский, Полн. собр. соч., в 13 томах, М., АН СССР, 1947-1959 т. VI, 427)。その他、この両作品及びピカレスクとの関係を扱った論稿としては、タマルチェンコの《Мертвые Души》がある (в кн. История русского романа, в 2 томах, М.,-Л. АН СССР, 1962, т. 1, стр. 324-358.

あるすべての重要な事柄の、正しい絵巻を創り出す。そして、作者がとりあげた時期及び時代における、あらゆる観察力ある同時代人の視線を惹きつけるに足ると認めたところの、この世の欠点、濫用、悪徳を、殆んど統計的にまで把握した絵巻を創り出す。」さらにこの種の作品の主人公は、「部分的な取るに足らない人物ではあるが、多くの点で重要な人物」である。「作者が、事件とその変遷の鎖を通して主人公の生活を導き出す」ので、登場人物相互間の「関係は離れて」おり、従ってまた、「作者は、登場人物たちを、素早く、かつ多くの点で脇を通りすぎて行く現象として動かすことができる。」要するに、〈小形式のエポペーヤ〉は、〈エポペーヤ〉のような「全世界的なもの」ではないが、ロマンとも異って、「注目すべき部分的諸現象を国民叙事詩的範囲 эпический объем で集めたものである。」⁴⁴⁾

以上がゴーゴリの言う〈小形式のエポペーヤ〉の内容規定であるが、これが〈ポエマ〉を指すものであることは明らかである。彼は、世界文学史の歴史的俯瞰に立脚して新しいジャンルを設定したというよりも、《死せる魂》の新しい意味を説明するという直接的必要に即応して〈小形式のエポペーヤ〉というジャンルを考え出したと言える。「取るに足らないが、多くの点で重要な人物」というのは、作者の観察と、対象化された現象を普遍化するという意味で重要なのであり、このような人物を「事件とその変遷の鎖を通して」描くこと、「登場人物を容易に動かして、一つの現象として把えること」、「この世の欠点、濫用、悪徳」を描くこと、そして「部分的諸現象を国民叙事詩的範囲で集め」ること、という、これらの内容規定は、すべて《死せる魂》と密接に関係している。

6

《死せる魂》は、チチコフが県庁所在地 NN 市に馬車で乗りこんでくるところから始まる。自分の物質的欲望を満足させるために、他人に巧みにとり入り、場合によっては自己を卑しめることも辞さない詐欺師のチチコフは、知事邸の夜会で近隣の地主と知り合い、訪問する。そして、感傷や白昼夢にひたって満足し、自分の行為の無意味さに気づかないマニーロフ（第2章）、小金を貯めこんだ、しまり屋で疑ぐり深い女地主コロボチカ（第3章）、口から出まかせの大ぼらを吹いて身代をつぶしている性格破産者ノズドリョフ（第4章）、鈍重で、粗野で、それでいて抜け目のない、うす汚れた熊のような人間ソバケーヴィチ（第5章）、人間の本能の底にある物欲の醜さをすさまじいばかりに体現した吝嗇漢プルーシキン（第6章）といった人物が、それぞれにひとつの現象として独立に各章で自由に語られる。ここでは、登場人物相互間の関係は離れているのである。従ってまた、それらの間には、作者の説話体の混入を含む、独立の無数の小場面が自由に挿入できるのである。第1部第1章の冒頭からして、すでにゴーゴリの表現形式の特徴を十分に示していると言えるであろう。

「県庁所在地 NN 市のある旅館の門に、ばねつきで、小型のかなりきれいな、半蓋四輪馬車が乗り込んできた。それは退役した陸軍中佐とか、二等大尉とか、百人ほどの農奴をかかえた地主とか、——要するに、中どころの旦那と呼ばれる独身者などが乗りまわす類

44) Гоголь, т. VIII, стр. 478-479.

《死せる魂》について

の馬車だ。馬車にはひとりの旦那がおさまっていたが、それは美男ともいえぬが醜男でもない、あまり太っていないが、それほどやせてもいない、歳をとっているとはけっして言えぬが、さりとてあまり若いとも言えない男だった。この旦那が乗り込んできたからといって、市になんの騒ぎが起きたわけでもなく、また何ひとつ特別の事態が持ちあがったわけでもなかった。もっとも、旅館の向い側にある居酒屋の戸口につっ立っていた二人のロシア人の百姓が、なにか二言、三言意見を交わしたが、それも乗っている客のことよりも、馬車のことを話題にしたのだ。『おい、見ろや』と、ひとりが相手に向かって言った。『てえした馬車じゃねえか！ ひょっとしてモスクワまで行くとしたら、あの馬車で行けるかな、行けねえかな、おめえ、どう思うだ？』『行けるともよ』と相手は返事した。『でもなあ、カザンまでは行けねえべよ』ともうひとりが答えた。それきりでその会話はおしまいになった。⁴⁵⁾

NN 市に一頭の馬車が乗りこんがきて、ひとりの旦那が乗っていたが、だからと言ってこの市に何の騒ぎも起らなかった。ただ、それを見た二人の百姓が二言、三言その馬車について話ただけだ、と述べられていながら、次にこの二言、三言の内容がかなり丁寧に紹介される。「おい、見ろよ。てえした馬車じゃねえか。ひょっとしてモスクワまで行くとしたら、あの馬車で行けるかな、行けねえかな、おめえ、どう思うだ」「行けるともよ」——この会話は、ごくありふれたくだらない内容の話を大真面目でやっていることに一種のユーモアを感じさせるが、ただそれだけのことで二人の百姓は、小説世界にとってなんの役割も持っていないように思われる。事実、彼らはこの場かぎりで姿を消してしまうのだ。彼らはただ単に傍観者として目の前を通りすぎた馬車について噂話をしているにすぎない。だが、実は、傍観者にすぎないこの二人の百姓の馬車談議が丁寧に述べられることによって、彼らの対象としている世界が、実に無内容な世界であることを示しているのである。一日に馬車は何台もやってくるであろう。だからこそ、チチコフの馬車は注意を惹かなかつたのだが、それが二人の人間の興味を惹いて、話題の対象となったということは、おそらく他の馬車についても彼らはこのようにやはり噂話をするにちがいない。この出だしのちょっとした描写によってゴーゴリは、すでに NN 市の凡俗的な空気的一端をとらえているのである。ゴーゴリは、このようにして、一見作品の主要な運びとは無縁であるかのような無数の独立した面を組合せて、《死せる魂》の世界を構成して行く。このわずかの描写の中にも、ゴーゴリの細部に対する鋭敏な感覚、描写力がひとつの調和した全体をつくり出しており、それは、ゴーゴリの描く世界の雰囲気とも言うべきもので、彼の才能がポエマという新しい独特の世界を創造しえた、あるいはまた、そうでなければ彼の才能が発揮されえなかつたであろう必然を示している。

チチコフは、ありふれた旅館に入り、ありふれた部屋に通される。そして、下僕が片づけものをしている間に広間へおりて行く。

「この広間というのが、いかなるものであるかは、およそ旅行者ならだれでもよく知っているはずだ。ペンキ塗りの例の壁は上の方が煙草の煙で黒ずみ、下の方はいろんな旅人たち、というより土地の商人の方が多いのだが、その背中でこすられて、てかてか光って

45) Гоголь, т. VI, стр. 7.

いる。商人たちは市の立つ日には六人、七人と連れだってここへやって来ては、きまってお茶を一人前ずつ飲んでいくからだ。それから例のすすけた天井と、例のすすけた釣り燭台だが、それには切り子ガラスがどっさりぶらさがっていて、海辺に群がる鳥のように無数の茶碗をのせた盆を給仕が威勢よく振りまわしながら、床のすりきれた油布の上を走りまわるたびに、はねあがったり、ちりちり鳴ったりするのだ。また壁いっぱい懸け並べた例のごとき油絵、つまりすべてがどこにでもあるのと同じ調子なのだが、ただ違う点は、その中の一枚の絵に、おそらく読者だってついぞ見たことがないだろうような、大きな乳房をもったニンフが描かれているくらいのものである。もっとも、こういう自然のいたずらは、いつ、どこで、誰の手でわがロシアに持ちこまれたかわからぬいろんな歴史画によくあることで、それらの歴史画の中には、芸術愛好家たるわが国のお偉方が……イタリヤで買いこんできたものだってなきにしもあらずなのだ⁴⁶⁾

この広間の描写は、いわゆる客観描写とはかなり異っている、と言えよう。「ペンキ塗りの例の壁」 те же стены, 「例のすすけた天井と、例のすすけた釣り燭台」 тот же закопченный потолок, та же копченая люстра, 「例のごとき油絵」 те же картины といった表現が多く出てくるが、これは、先ず概括的イメージを提起し、次にその具体的色彩や細部の形の描写に入ることによって、ゴーゴリ独特の細部の描写における鋭さが全体的統一を保つ役割を果しているのである。しかもこの場合、「例の……」とか「同じ……」といった表現には、作者からの読者に対する直接の働きかけが含まれており、一般的概念に従った概括的イメージを自然に構成させることになるので、そのあとでは、読者は、いわば、作者の描く細部の描写に従って作者と共に自分自身が全体像を構成していくことになるのである。

もちろん、厳密な写実を生命とするロマンにおいても、われわれはイメージを構成する。だがその場合には、筋にのったひとつの有機体としての物語世界自体の独立した展開がすでに前提されているのであり、それに従って厳密な客観的写実描写はひとつの状況として定着される。つまり、すでにその物語世界で一定の場所、位置を得たものでなければ、〈та же〉といった表現は基本的にあり得ない。われわれは、その世界に外部から一般的概念に従った概括的イメージを直接に持ちこむことはできないのである。ところが、《死せる魂》においては、この一般的概念にもとづく（それは歴史的規定性を離れたものではあり得ないが）概括的イメージとの対比において、ゴーゴリの描く世界の細部の新鮮さ、奇抜さ等に驚嘆しながら、微妙な差位を持った全体像をはっきりとイメージとして構成できるのである。正確な写実という枠にとらわれず、自分の目を通してデフォルメされたゴーゴリの描写が⁴⁷⁾ 全体的統一像として把握されるために極めて有効な手段なのである。その点で、「おさまりの」 известный род, 「読者もよく知っているような」 как

46) Гоголь, т. VI, стр. 9.

47) これについてベリンスキイは次のように述べている。「われわれは、作者が次の点で大成功を取め、長足の進歩をなしたとみなす。すなわち、《死せる魂》においては、いたる個所ではっきりと、いわば肌に触れて感じるように、彼の主観性 субъективность が貫いていることである。もちろん、ここでいう主観性とは、視野の狭さ、もしくは一面性によって、詩人が描くはずの対象の客観的現実性を歪めてしまうような、それではない」(Белинский, Полн. собр. соч., в тт. 13, М., АН СССР, 1947-1959, т. IV, стр. 217.)

《死せる魂》について

читатель хорошо знает, といった、よく使われている表現も、〈тот же〉と同質のものである。むしろ、作品の受容者に対して主体的イメージの構成を迫るという点では、〈тот же〉よりも強い調子がある。そしてまた、「おそらく読者もかかってみたことがないような」читатель, верно, никогда не видывал といった表現も、逆の関係においてやはり同質のものである。要するにこれらの表現は、語り手たる作者が、その裏にいて自分の目に映じたものを次々と自由に表現することを可能にしている。さらにゴーゴリは、こうした手法を一步進めて、もっと直截な形で、つまり作者自らが客観描写の中に直接顔を出すことによって、例えば、「(私には) はっきり言うことはできないが」наверное не могу сказать とか、「何かわからないが」неизвестно, что..., といった表現をとることによって、個別から一般へ、一般から個別へとめまぐるしく描写を転化するのである。

「さて、紳士は大黒帽子を脱ぎ、虹色の糸の襟巻を首からほどいた。こんな襟巻は、女房持ちの男であれば奥方が手ずから編んでくれて、巻き方までちゃんと教えてくれるものなのだが、独り者には誰が編んでくれるものやら、それは神のみぞ知るで、私にははっきり言うことができない。なにしろ私などはそんな襟巻を一度だって巻いたためしがないのだ。襟巻をほどいてしまうと、紳士は食事を持ってくるように言いつけた。」⁴⁸⁾

以上に述べた手法は、《死せる魂》のような、筋の発展を中軸として一定の起承転結をもった作品とは異なる、個々の場面や、諸人物ひとりひとりの独立した描写そのものの価値を生命とする作品に非常によく適合していると言えよう。ただこの場合、ゴーゴリがその効果を綿密に計算して描き出したというよりは、彼の才能からひとりでに迷り出した調子といったものが全体を支配しているかに感じられる。《死せる魂》が従来のロマンとは非常に異なった表現形式をとり、ポエマと銘打たれた根本には、ゴーゴリ自身の自己表出と対象化された世界の客観的叙述とが、彼の表現力を通して存分に展開されるための表現形式として、これ以外にあり得なかったという必然性を認めなければならない。

7

ゴーゴリが《死せる魂》第2部の構想を具体的に抱いたのは、おそらく1840年5月から12月までの間ではなかったかと推定される。《死せる魂》第1部第7章の初めの部分には「私は、これからまだ長いこと、ある不思議な力に惹かれてわが奇妙なる主人公たちと手に手をたずさえて進み、人の世の移りゆく巨大な姿を……見とどける運命を負わされているのだ！そして、聖なる畏怖と光輝におおわれた章の中から靈感の激しい嵐が今までとは別の泉となって湧きおこり、人々がこれまでとはちがった言葉の偉大なとどろきを耳にして、不安に胸うちふるわせるときはまだまだ遠いのだ……」⁴⁹⁾とあり、最終の第11章の終りの部分には「二人(作者とチチコフ)はこれからも手に手をとってかなり長い旅の道をゆかねばならないのだ。前途にある長大な二部——これはなまなかの仕事ではない」⁵⁰⁾と述べられているが、これらの叙述は、検閲原稿の直前に清書されていた草稿(第5草稿)に初めて現われたものである。時期的に言えば1841年10月～12月の間である

48) Гоголь, т. VI, стр. 9.

49) Гоголь, т. VI, стр. 134-135.

50) Гоголь, т. VI, стр. 245-246.

が、⁵¹⁾ 1840年12月28日付きの手紙（C. T. アクサーコフ宛）では次の様に書いている。「私は今、《死せる魂》第1部を完全に仕上げるための準備をすすめています。……一方、第1部の続編は、私の頭の中でもっと純粋な、もっと偉大なものとして、はっきりしています。ですから、現在私の衰えた体力が許しさえすれば、今に巨大なあるものになる、ということが判っているのです。」⁵²⁾ 従って、この間に約1年の開きがあるが、《友人との往復書簡撰》の中に述べられている「5カ年の労作を焼きすててしまうことは、たやすくなかった」⁵³⁾ という文言からして、《第2部》の執筆開始が41年の前半であったと思われるから、⁵⁴⁾ 構想を具体的に抱いたのが1840年5月～12月という推定はそう間違っていないであろう。

ゴーゴリは1839年9月から40年5月まで帰国していたとき、次のように語っている。「自分がどうなっているのかぼくにはわからない。ペテルブルクでのぼくの生活がどんな風に過ぎたか！ ぼくは何も考えることができないし、何も頭に浮ばないのだ。ここでもうひと月も時間をつぶしたのだと思うと——恐ろしい。」⁵⁵⁾ (1839年11月27日、ポゴージン宛)、さらに、1840年1月4日付、ジュコーフスキイ宛の手紙では「ロシアでの私の存在はなんと奇妙なのでしょう！ なんとという重苦しい眠りでしょうか！ おお、早く目を覚みたいものだ」⁵⁶⁾ と書き、1月25日付のポゴージンに宛てた手紙では「おお、後生だからぼくを遠くローマへ追いやってほしい。そうすればぼくの心は休まるのだ。早く、早く、ぼくは破滅してしまおう」⁵⁷⁾ と書いている。

ここに述べられたロシアでの重苦しい気持や憎悪とローマへの憧れ——この両者は、際立った対照を成しているが、それだけにローマへ戻ったときの彼は、一層強くロシアに対する奉仕の観念を持ったにちがいないのである。「みなさんのところへ行ったときには、私はその旅行の意義を理解していなかったのですが、そこには私にとって実に沢山のことがあったのです。そうです。ロシアに対する愛の感情、これが力強く湧いているのを感じます」⁵⁸⁾ (1840年12月28日付、C. T. アクサーコフ宛)とローマから書き送っている。つまり、一時の帰国で得た憎悪とその後のローマでの対照的な生活が、それまでゴーゴリの内部にあった美しいロシアを作品として具体化すること、「全美徳」と「全欠点」を持った完全なロシア人を描くという構想の具体化を促したのである。

しかし、「全美徳」を持ったロシア人を描こうとし、チチコフに善を志向させようとしたとき、彼の作家的本質は観念の欲するままにならなかった。彼は無意識のうちにもそのことを感じていたようである。「私は執筆を続けています。つまり渾沌としたもの хаос

51) Гоголь, т. VII, стр. 392-393.

52) Гоголь, т. XI, стр. 286.

53) Гоголь, т. VIII, стр. 297. これが書かれたのは1845年秋である。

54) ゴーゴリ全集の編者たちは、《第2部》執筆開始を43年と推定している（Гоголь, т. VII, стр. 399-400）が、フラプチェンコは41年説をとっており、この方が正しかろう（Храпченко, Творчество Гоголя, М., АН СССР, 1954, стр. 477）.

55) Гоголь, т. XI, стр. 264.

56) Гоголь, т. XI, стр. 268.

57) Гоголь, т. XI, стр. 274.

58) Гоголь, т. XI, стр. 286.

《死せる魂》について

を紙の上に書きつけているのですが、そこから《死せる魂》が創り出されるにちがいありません』⁵⁹⁾ (1843年12月2日付, ジュコーフスキ宛)。

現在, 《死せる魂》第2部として刊行されているものは, ゴーゴリの死後発見された5冊のノートに再構成したものである。このノートは, 49-50年にかけてゴーゴリが朗読した原稿の下書きと考えられ, 四つの章と終章の5章から成る。⁶⁰⁾

このつ5の章とアルノリジ, オボレンスキイ, チジョフ, ベルグ等の回想等から判断すると, ゴーゴリが死の直前に焼却した二度目の草稿はほぼ完成して11章から成り, いわゆる物語的要素, すなわち筋の起伏という点では第1部よりも複雑だったらしい。⁶¹⁾ その理由は, 第2部がチチコフの再生, 善行への目覚めの過程として構想されたために, 単にチチコフが死んだ農奴を買う目的で地主連中を訪れるという筋の設定だけでは, 諸事件を通して様々な人物の特徴, 性格や社会を描くことはできても, チチコフの更生の過程を物語として描き出すのが困難であった, と考えられるのである。そのためには, どうしても物語的筋の設定を必要としたにちがいない。ゴーゴリは, チチコフの更生と共に, テンテートニコフとウーリニカの恋愛を副次的縦系として設定しており, 現存のノートにはないが, オボレンスキイの回想によれば, 物語の終り近くで, テンテートニコフは若い頃にまきこまれた事件が原因で官憲に逮捕されてシベリヤへ送られ, ウーリニカがその彼を追ってシベリヤへ行く, というようになっていた。その意図は, 善行への志向に燃える実行力ある女性の愛が怠惰という悪からテンテートニコフを救済するということにある, と考えられる。

一方, 主要な筋としてのチチコフの救済は, 専売人ムラーゾフの神への帰依, 博愛, 禁欲を説く説教によってなされるのであるが, こうした理想の人物は, 第1部の諸人物や第2部に登場する同様のペトッフ, コシカリョフといった人物のつくり出す小説の世界とは全く異質であり, そこには埋めることのできない溝がある。

ゴーゴリの才能と小説の成り立ちという面から考えるならば, チチコフの更生, テンテートニコフとウーリニカの恋愛という物語的筋が色濃く出ることによって, 第1部に見られた諸人物の多面的組合せ, 筋の展開とは無関係な作者の説話体を用いた個別から一般へ, 一般から個別へと行った, あるいは又抒情的章句による中断といった自由奔放で絢爛たるゴーゴリ独特の表現力がその力を奪われてしまった, とも言える。つまり, ゴーゴリは, 第2部でもポエマとして意図しながら, 識らずのうちに, 彼が《ロシア青年のための文学の教科書》で分類したロマンに近づいてしまったのである。さらにまた, 彼の才能の本質が, 理想的善を求める人物を描くのに適していなかったということも言える。「まるで……のような」という彼の奇抜な直喩法による人間の欠点を描く手法では, 理想的な, 人格的に完全な人間を描くことができなかつた, ということである。逆に言えば, 彼のすぐれた想像力は, そうした直喩法を用いることによってはじめて大きな表現力となり得た

59) Гоголь, т. XII, стр. 239.

60) 終章とは後に付けられた名称であるが, この章だけは1845年に焼却した原稿の残りであると推定されている。(Гоголь, т. VII, стр. 393-432).

61) В. В. Каллаш, Н. В. Гоголь в воспоминаниях современников и переписке, М., Изд-во Думов, 1924, стр. 61-70, 87-88.

のであり、またそうでしかあり得なかったのである。

最後に、今ひとつの付け加えておかねばならないことは、ゴゴリの作家的精神とも言うべきもので、初期から一貫してみられる、自己の作品に対する厳格な否定的態度である。すでに1833年にポゴジンに宛てて次のように書いている。「あなたは、《ディカニカ》のことをたずねておられます。あんなものはくそくらえです。私はあれを出版しません。たとえ、金銭的収入が私にとって必要なものだとしても……」⁶²⁾ さらに1837年にもプロコポーヴィチに同様のことを書いている。「私は自分の下手な作品のすべてを思い出すと恐ろしくなります。それはまるでいかめしい告発者のように私の目に映ります。……もし《検察官》の発行部数全部、それといっしょに《アラベスキ》、《夜話》、その他のたわごと全部をいきなり喰べてしまうような紙魚が現われたら……私は運命に感謝するでしょう。」⁶³⁾

われわれは、ここにゴゴリの恐ろしいまでの作家精神を見る。彼の一瞬一瞬は、自己の前進にあり、そのためには過去の一切を否定するのである。だが、こうした自己の精神世界を対象化した作品の否定ということは、自己自身の否定でもあった。ゴゴリはこれを徹底的に遂行したのである。そして、この自己否定の裏には、自己の社会的価値を客観的に位置づけたいという志向があった。これもまた彼の生涯を一貫しているものである。この自己否定と自己の社会的価値の実現に対する志向という二つの要因は、相互に補完し合って彼の作家活動のみならず、その人間性をも規定した。彼は、作品を通して自己の社会的価値を実現しようとしたとき、自己の作品世界が、醜悪な人間の本能を完膚なきまでに暴き出していることに気づいたのである。

彼はそれに満足できなかつた。彼は、自分の社会的価値の実現という志向は、ロシアに対する愛と一体化しなければならぬものと考えていたのだ。それは、《死せる魂》第1部第11章にロシアへの呼びかけとなって現われた。

「おまえに心を惹きつけるこの玄妙な、神秘の力は、いったいなんであろうか？ おまえの長さや広がりやのすべてにわたって、海から海へと伝わる、おまえのもの悲しい歌声が、どうして休みなく聞こえ、耳たぶを打つのだろうか？ この中に、この歌の中にあるのはなんであろう？ われを呼び、慟哭し、心をつかんで離さないのはなんであろう？ 悩ましき口づけを与え、魂に喰い入り；わたしの心臓にからみつく響はいったいなんであろうか？ ロシアよ、おまえは、このわたしにいったい何を望んでいるのだ？ おまえとわたしの間にはどんな不可思議なつながりが秘められているのだろうか？ おまえは何をそんなに見つめているのだ。おまえの内部に存在するすべてが、どうしてこのわたしに期待に満ちたまなこを向けるのか？（中略）この無限の広がりや、何を予言しているのだろうか？ おまえ自身が涯しなき存在である以上、この大地に、おまえのうちに、どうして無限の思想の生まれぬことがあろうか？ 剛勇の者の伸々と活躍する場がある以上、どうしてそのような者がこの大地に存在せぬことがあろうか？ この力強い広がりや、恐ろしい威力でわたしの心の奥底にその姿を映しながら、怖しいまでにわたしを抱きすくめる。わたしの

62) Гоголь, т. X, стр. 256.

63) Гоголь, т. XI, стр. 84.

《死せる魂》について

両のまなこは異常な力に輝く。おお！なんと輝やかしく、すばらしい未だ世に知られぬ僻地であろう！ ロシアよ！」⁶⁴⁾

これは、ゴーゴリのロシアへの愛、その未来に対する期待と彼の社会的価値実現への志向が調和した見事な抒情詩である。彼は未だ開かれぬ渺々としたロシアに本能的に心惹かれ、自分のしなければならぬことを期待に胸おどらせながら聴こうとした。この抒情的な章句は、ゴーゴリのロシアへの愛、及び社会的価値実現の志向と、彼の表現力とのいわば最良の、そして最高の均衡点であった。ここから彼が、ロシアへの愛を支えとして、社会的価値の実現へ一歩踏み出したとき、彼の文学は急速にその力を失ったのである。

Несколько слов о «Мертвых Душах» Н. В. Гоголя

Кэйдзо ХАЙЯ

Автор настоящей статьи, учитывая жанровое своеобразие произведения, ставит себе целью как бы раскрыть судьбу замысла Гоголя в ходе его работы. Гоголь, как установлено, принялся за работу над «Мертвыми Душами» в 1835 г. Однако работа эта на время приостанавливалась из-за другого произведения т. е. комедии «Ревизор». Вокруг премьеры «Ревизора», который имел место в Петербурге в 1836 г., поднялось много шума, а Гоголь, не переносив разгоряченной, порой враждебной по отношению к автору атмосферы в среде театральной публики и писательского круга, покидает родину.

Таким образом теперь, живя на чужбине, Гоголю приходилось отрабатывать так называемую 1-ую часть «Мертвых Душ». Работа завершается лишь в 1841 г. А Гоголь давно лелеял план 2-ой части «Мертвых Душ». Однако ж этот план оставался незавершенным: черновики, как известно, заброшены автором в огонь два раза.

Одни исследователи Гоголя видят причину неосуществления плана 2-ой части «Мертвых Душ» в духовном кризисе писателя, а другие совсем не видят каких-либо противоречий в его мировоззрении и творчестве. В чем причина неудачи Гоголя ко 2-ой части «Мертвых Душ» — вот что и автор настоящей статьи пытается разбирать. К разбору привлекаются автором и эпистолярные данные Гоголя и такие «внелитературные» сочинения, как-то: «Авторская исповедь», «Учебная книга словесности для русского юношества» и др. Вообще автора интересует проблема жанра и стиля и в особенности названное самим Гоголем жанровое название «Поэма.»

Насколько это удалось и как убедительно вышла статья, судят читатели. Между тем автор надеется на их отзывы.

64) Гоголь, т. VI, стр. 220–221.